

高橋 瑛子〔環境省中国四国地方環境

事務所国立公園・保全整備課〕

～地域から考える～生物多様性の保全と

持続可能な利用への取組



生物多様性とは

岡山県には、瀬戸内海や吉備高原、中国山地などの多様な生態系の中に13,963種以上の動植物が生息・生育しています（岡山野生生物目録2009）。これらの生態系や生き物はお互いにつながりあい、支えあって生きています。このつながりは例えば山から川、海への水の流れや、食う食われる関係の食物連鎖などから見るすることができます。さらに、中国地方のみに分布するスイゲンゼニタナゴ、瀬戸内海特有の多島景観など、生物や自然にはその土地特有の個性があります。「生物多様性」とは、このような自然や生物のつながりと個性のことです。私た

ち人間も、大きないのちのつながりの一員であり、このつながりによって生かされています。

生物多様性がもたらす恵み

私たちが日々当たり前と思っている事柄の多くは、生物多様性がもたらす恵みと深く関係しています。

スーパーに並んでいる瀬戸内海の海の幸。その豊富な魚介類は、プランクトン、海藻、山から供給される栄養分などの様々な生物・自然のつながりによって育まれています。私たちがおいしい瀬戸内海の魚を口にできるのも、豊かで健全な生物多様性があるからです。

その他にも、生物の遺伝的な情報や機能を用いた医薬品、豊かな森林による山地災害の軽減、自然と一体になった伝統文化など、生物多様性によって私たちの暮らしは支えられています。

先日、兵庫県でB級グルメグランプリが開催され、見事岡山のひるぜん焼きそばがゴールドグランプリを受賞しました。B級グルメには、その地域特有の食材や調理法が用いられています。このことから地域特

有の自然環境が魅力あふれる地域づくりにつながっていることがわかります。

COP10開催を受けて

2010年10月、生物多様性条約第10回締約国会議（CBD-COP10）が開催されました。COP10には締約国180カ国、国際機関、NGO等13,000人以上が参加し、主な成果として遺伝資源へのアクセスと利益配分（ABS）に関する名古屋議定書と2011年以降の生物多様性保全の目標を定めた「新戦略計画・愛知目標」が誕生しました。

新戦略計画のビジョンは「自然と共生する」世界の実現であり、2050年までの中長期目標と、20の個別目標が合意されました。個別目標には「2020年までに陸域の17%、海域の10%の保護地域化する」など具体的な期限や数値目標が盛り込まれました。

愛知目標は世界レベルの枠組みとして位置づけられています。今後、この枠組みの中で各国が国別の目標を設定し、取組を進めていくことが求められます。

高橋 瑛子 氏

2010年3月東京農工大学
農学部 環境資源科学
科卒業

2010年4月環境省入省
自然環境局野生生物課
に配属

2011年4月環境省中国四
国地方環境事務所国立
公園・保全整備課に配属

COP10 による生物多様性への世界的な関心の高まりの中、地域の実情に合った取組を行っていくことが重要です。なぜなら、生物多様性のあり様は地域ごとに異なっており、画一的な施策だけでは取組は進められないからです。同じ海でも日本海や瀬戸内海の違い、事業者や農家などそこに暮らす人々の違い、鳥獣被害や外来種対策のような地域の抱える問題の違いなど、自然環境や課題は地域ごとに異なっています。

環境省中国四国地方環境事務所の取組

環境省中国四国地方環境事務所では、スーパーや動物園などで「外来生物を学ぶ展示会」を行っています。外来生物や、外来生物による影響をより多くの方に知ってもらうことを目的とし、ヌートリアやアライグマなどはく製・パネルを使って解説しています。

外来生物とは、元々その地域にいなかった生物で、人間の活動によって他の地域から入ってきたものを指し、特に海外起源のものを言います。その中でも生態系や人の身体、農林水産業へ被害を及ぼすおそれがあるものを国が「特定外来生物」に指定し、輸入・飼育などを規制しています。

岡山県にも身近な所に外来生物がいます。今朝の通勤途中に旭川の斜面に黄色い花が一斉に咲いているのを見かけました。この花はオオキンケイギクといい、



動物園での展示・説明会

1880年代に観賞用、緑化用として導入されたものです。オオキンケイギクの繁茂によって、その地域に生育していた在来植物が減少するなどの問題が起きています。

動物園の展示会では、「ヌートリアは日本の生きものだと思っていた」という声がよく聞かれました。ヌートリアは戦前に毛皮用として輸入され、需要の低下によって野外に放逐された動物です。農作物への食害などの被害を及ぼすため、特定外来生物に指定されています。現在、岡山県での捕獲数は国内で最も多く、川で泳いでいる姿を見かけるほど個体数が増加しています。

外来生物問題の解決のためにはペットを野外へ捨てない、野外にいる外来生物を他地域に広げない、など1人1人の心がけが大切です。しかし、ヌートリアが外来生物であることを知っている来園者が多くなかったように、「(特定)外来生物」という生物の存在自体を知っている方はあまり多

くないようです。

地域から出来ること

外来生物の取組を通して、生物多様性の保全・持続的な利用のためには、地域の方々に「地域の生きもの」や「生きものと環境の関係」、さらに「自分たちが出来ること」を知ってもらう必要があると感じました。

生物多様性のために出来ることは何か、漠然としていてわからないかもしれません。しかし、今日の朝ご飯の鮭がどこから来たのか考えてみるだけでも、海・川・山のつながりが見えてきます。地元の野菜を食べることで、田畑で野菜が育てられ、そこに住む生物が暮らしていけます。電気をこまめに消すことは、地球温暖化で被害を受けている生物への影響を軽減させます。このように、日々の暮らしの中で出来ることはたくさんあります。生物多様性への関心が高まり、生物多様性のための行動が広がるよう、地域のみなさんと一緒に取り組んでいきます。